

『歴史地震』の標準書式(2nd)

財団法人地震予知総合研究振興会 地震調査研究センター* 松浦 律子

産業技術総合研究所 活断層研究センター† 佐竹 健治

Modified Standard Format for "Historical Earthquakes"

Ritsuko S. MATSU'URA

Earthquake Research Center, ADEP, Chiyoda Build. 5F 1-5-18, Sarugaku-cho, Chiyoda-ku,
Tokyo, 101-0064 Japan

Kenji SATAKE

Active Fault Research Center, AIST, Site C7 1-1-1 Higashi, Tsukuba,
Ibaraki, 305-8567 Japan

The second edition of standard format for "Historical Earthquakes", the annual journal of the Society of Historical Earthquake Studies is summarized. It basically follows the format of "Zisin", Journal of the Seismological Society of Japan. Unlike "Zisin", however, the authors need to prepare camera-ready manuscript. The format is only standard and recommended, but not mandatory.

Keywords: Standard Format, Historical Earthquakes.

§ 1. はじめに

歴史地震研究会の会報『歴史地震』は23号からは投稿規定[歴史地震研究会(2007a)]と査読システムを完備した学術雑誌となった。印刷経費節減のため、17号以降採用されてきた標準的な書式を今後も踏襲し、基本的に投稿者が標準書式のカメラレディ原稿を用意することを前提としている。ただし、この書式に添わないからといって一律に排除するものではない。標準書式に沿いたいのが技術的に困難という方には、編集委員会事務局において可能な範囲で相談できることは、従前と同じである。

17号用に作られた“佐竹版”からの変更点は、英文5語程度の Keywords: を要旨の下に足したことだ。カラー図も費用負担すれば口絵として可能となった。投稿者のチェック用に点検シート[歴史地震研究会(2007b)]がウェブサイトにあるので、ご活用頂きたい。

§ 2. 標準的な書式

『歴史地震』17号から、A4サイズでのオフセット印刷である。著者が準備したカメラレディ原稿がそのま

まの大きさと印刷される。

以下に書式の詳細を記載する。全体的なことから詳細への順に並べたので、できるところまで従って頂きたい。

2.1 原稿の大きさ

原稿はA4サイズとし、左右の余白は2cmずつ、上下の余白は2.5cmずつとする。本文は2段組とし、段の長さは8cm、段間は0.7cm程度とする。

図表は本文中に組み込んで、最後にまとめてもよい。カラー図はモノクロ印刷されるが、ウェブ閲覧用の電子ファイルではカラーである。冊子にカラー図や写真を掲載したい場合は、口絵にカラーで掲載可能である。但し本文中に同じ図をモノクロで掲載することになる。カラーは費用負担があるので、本文中より小さい縮尺で口絵に掲載することも可能である。

2.2 タイトル・著者名・連絡先

タイトル・著者名は和英併記とする。著者の所属とともに、連絡先(住所と電子メールアドレス)を明記する。

* 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-5-18 千代田ビル5F
電子メール: matsura!adep.or.jp 注: Junk Mail 対策で一部改変

† 〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7
電子メール: kenji.satake!aist.go.jp

脚注として追加してもよい。

英文タイトルをつけるのは、『歴史地震』の掲載論文を英文の論文から引用する際に必要となるからである。タイトルや著者(読み方)を第三者が英訳するのは困難であり、著者の意図しない訳が複数出現することを避けるためである。

尚、ウェブ閲覧用のファイルでは、ジャンクメール対策として連絡先のメールアドレスは@を変更するなど細工をしてそのままでは使えない状態で公開することを了承されたい。

2.3 文献の引用例

史料名・書名には二重括弧『』を用い、文章の引用には括弧「」を用いる。本文中での引用例を以下に示す。引用文献の発行年はつねに丸括弧()に入れ、共著者が2名の場合は併記し、3名以上の場合は(最初の著者名・他)のように書く。

”これらの研究[Andrews(1981, 1985), 井合・他(1978), 狐崎・野越(1984)]のように. . .”, ”たとえば, Lomnitz et al. (1963)のように. . .”

文献リストの書き方については、例を参照のこと。

2.4 英文要旨・図表の説明

可能な限り、英文要旨を入れる。また、図・表の説明も和英併記とする。これらによって、日本語が読めない読者にもおおよその内容が理解される。また、検索などの便宜のために英語で5語程度までのキーワードをつける。

2.5 文字の大きさなど

全体を通し、和文フォントは明朝体、英文は Times、句読点は。(ピリオド)、(コンマ)を標準とする。さらに、英数字は半角とする。

タイトル・所属・著者名は、2.2 で述べたように、和文・英文併記とする。これらについては、和文タイトルは16ポイント、英文タイトルは12ポイント、所属・著者名は和英ともに10.5ポイントを標準とする。

本文は文字10.5ポイント、1行の文字数22字、1ページの行数45行程度で、2段組(段の長さは8cm、段間は0.7cm)とする。

§3. 日付の表現について

『歴史地震』では、小山・早川(1998)の勧告に従い、歴史地震の日付の表現について、できる限り以下の原則に従うこととする。海外との比較においても、さら

に国内においても、年代が古くなるほど、場所ごとに利用されている暦が異なる場合があるなど、日付や年代には注意が必要なことを認識したい。

3.1 和暦と西暦の違いをきちんと認識し、和暦の表記には漢数字を利用する

和暦と西暦の月日が一致するのは明治六年の改暦以降である。それ以前は両者の月日にずれがあるため、両者を年月日まで書いて併記することが望ましい。たとえば、

1586年1月18日(天正十三年十一月二十九日)は数々の活断層調査からラブコールをされる有名な天正地震の日付である。西暦と和暦とを混同しないように、上記のように西暦はアラビア数字で、和暦は漢数字で月日まで書くことを推奨する。もちろん、天正十三年十一月二十九日(1586年1月18日)と和暦優先でも構わない。旧正月の行事から遠ざかる小世帯の日常では、和暦が略1ヶ月ずれていることを知らない理系読者もいる。特に和暦の年末に近い場合は西暦が先に新年となるので通常の換算表からずれることも知らずに天正十四年と誤解されないためにも、和暦の月日まで省略せずに記入することが望ましい。

尚、英文中では西暦の英語表記が現在の季節感との乖離もないので、混乱を避ける上で推奨したい。

また、和暦では「一年」はなく、「元年」である。たとえば、安政南海地震の発生日は

1854年12月24日(安政元年十一月五日)である。この地震など凶事が続いたこの年は地震から3週間後の嘉永七年十一月二十七日に安政と改元された。従って、各地の日記などの史料では改元前あるいは改元の情報が届くまでは嘉永七年となっている。現在であれば改元された日付で元号が変わるが、情報の同時性が保持されていない明治以前は、改元後に遡ってその年全体を改元後の元年として取り扱う。そこで、和暦は「安政元年」である。この地震も嘉永南海地震ではなく、安政南海地震と呼ばれてきた。必要ならば、「安政元年<嘉永七年のこと>」など読者に判り易くしよう。この他南北朝時代に元号が二種ある期間についても、内容によって読者に判るようにして頂ければよい。

3.2 1582年以前の西暦日付にはユリウス暦を用いる

日本では、歴史地震・噴火の西暦日付を1582年以前についてもグレゴリオ暦で表記する慣行が明治以来一貫しておこなわれてきた。このため、世界との

史料の整合性がともすれば失われる。巨大噴火の火山灰、巨大地震のゆれや津波は国境をやすやすと越えるから、世界との史料照合には注意が必要である。1582年より古い時代にグレゴリオ暦を適用することは避けるべきである。

§4. おわりに

はじめにも書いたように、この書式はあくまで標準的なもので、決して強制するものではない。一番重要なことは、『歴史地震』が歴史地震に関心のある方々に役に立つことであり、この学際的研究分野が発展することである。ご意見・ご要望などがございましたら、編集委員長までお知らせください。

謝辞

歴史地震研究会歴代幹事の方々には具体的なコメントを頂きました。特に投稿規定は林豊前編集長の労作です。記して感謝します。

対象地震: 1586年天正地震, 1854年安政南海地震

文献

- 今村明恒, 1932, 最近数年間に於ける二,三の著名な地震について, 地震, 1, 4, 608-617.
- Jeffreys, H., 1976, The Earth, 6th ed., Cambridge University Press, 574 pp.
- 河角 廣, 1972, 再び南関東地域に於ける強烈震の周期性について, 地震学会予稿集, no 1, 24.
- 小山真人・早川由紀夫, 1998, 歴史時代の地震・火山の日付をいかに記述すべきか, 地球惑星関連学会 1998年合同大会, Sf-p030. http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/public_html/koyomi98/koyomi98.html
- Minakami, T., D. Shimozuru, T. Miyazaki, S. Hiraga and M. Yamaguchi, 1968, The 1959 eruption of Shimmoe-dake and the 1961 Iimori-yama earthquake swarm, Bull. Earthq. Res. Inst., 46, 965-992.
- 歴史地震研究会, 2007a, 投稿規定, <http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/doc/kitei.pdf>
- 歴史地震研究会, 2007b, 投稿前チェックシート, <http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/doc/tokocheck.pdf>

東京大学地震研究所(編), 1989, 新収日本地震史料, 2, 575 pp.

都司嘉宣・上田和枝・佐竹健治, 1998, 日本で記録された1700年1月(元禄十二年十二月)北米巨大地震による津波, 地震 第2輯, 51, 1-17.

宇佐美龍夫, 1996, 新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416-1995], 東京大学出版会, 493 pp.

編者注:

Wordによる電子ファイルの書式が本文中に記述された標準書式と合致するように校正した。標準書式を変更するものではない。歴史地震研究会ウェブサイトから標準書式のWordファイルをダウンロードしたのち、それを書き換えて原稿を作成した場合に、より容易に標準書式を満たせるようにするためである。

(2016年4月22日 編集出版委員会 林 豊)